

不法占拠バラック・ウトロの残存過程と民族をめぐる場所の政治

全 ウンファイ

1. はじめに...残存した不法占拠地区

(1) 住宅供給の市民性 (*ここではスラム住民の居住権の確保)

- ・戦後直後の不法占拠地区：都市スラム。居住権から排除，クリアランスの対象
- ・スラムでの当事者政治は住宅供給の失敗を補う役割 (水内,2001;2004; 本岡, 2008)

(2) 市民性からの排除・不作為

- ・高度成長期以後の残存地区：開発が始まった市域周辺部に再形成・残存・エスニシティ集中

① クリアランス期：民族＝国民的共同体に基づく他者の排除 (不法占拠の違法化・国籍条項)

② 残存地区：自主的組織化が困難 (三浦, 2006; 金菱, 2008), 自治体や周辺地域住民との関係性が条件 (李, 2010), 在日の当事者政治も本国中心や「地域」ごとに展開 (文, 2005)

>>残存地区を高度成長期以後の貧困の社会空間の一つに位置づけたうえで，地区を抱えた地域での市民性の実践 (当事者政治を含め) から，不作為がどのように正当化されていたかを明らかにする。

2. 文化地理学の経験的・認識的方法論

(1) 政治的共同体像を具現する場所 (place)

- ・不作為：以前からの他者像と関係。民族的他者を主な対象にするが，当事者運動内でも起こる。
- ・場所：日常的経験に基盤する共同体との一体性ではなく，共同体像を具現する空間的な「もの」
- ・場所の変化を多面的に捉え，結果どのような空間が形成されたかを考察する文化地理学の方法

(2) エスニック空間—国民・民族の場所

- ・エスニック空間：ローカル空間であると同時に他民族の領土内に位置し，民族の政治を具現
- ・民族の政治的共同体：国民国家における国民や，連帯するマイノリティ (ギルロイ, 2006)
- ・国民の政治的共同体：
 - > 抽象的市民像の理想を領土と既存の民族集団を通して具現 (シュナペール, 2015)
 - > 民族自決主義に基盤した，エスニック空間への民族の政治は成立不可能な矛盾

>>残存地区への不作為の条件は，地区が国民的民族の共同体の場所と見なされること

3. 空間的背景—不連続的郊外開発とその地域社会

(1) 京都市南部の郊外開発と周辺地域社会

- ・戦時期：農村地帯→国・府による戦時期に軍事施設誘致，戦後生産施設は民間に払い下げ
- ・高度成長期：京阪神地域に出勤する核家族世帯向けの民間住宅開発 (都市計画に先行)

(2) ウトロ地区の形成と定着

- ・軍事施設の建設労働者が戦後直後～高度成長期の間の混乱期に定着

>>旧村落+高度成長期以後の都市通勤者。ウトロ地区はそのなかで際立つ社会的位置・景観

4. 地域紙から見た「在日」をめぐる場所の政治

(1) 集住地域と「在日」像：在日像を拡大再生産する「物的証拠」 (姜, 2002)

- ・戦前→現在に至るまで植民地的表象が残りながら (丁, 2011) 運動によって改善 (江口, 2003)

(2) 調査の概要と結果

- ・地域紙『洛南タイムス』の創刊～2010年まで 522 件の在日・ウトロ関係の記事を調査
- ・リストアップした記事をエリア，内容によって分類し時代的推移を分析→内容分析
- ・江口 (2003) による京都新聞分析との差異
 - ：1950年代以後の記事数の急減と脱政治化→記事自体の消滅 (80年代半ばまで著しい)
 - ：1970年代半ばから活発化した在日の当事者運動とも直接関連しない

(3) 「在日」をめぐる都市的葛藤と連帯の消滅

- ① 戦後直後の当事者政治の展開と行政との葛藤（～1950年代半ば）
 - ・～1955年：地区内部の民族団体活動が活発、GHQと対立しながら地域共産主義者と連帯失業など貧困の問題も連帯のなかで住民から掲げられる。
ただ、ウトロは他国民としても取り上げられており、分裂の可能性も孕む。
- ② 違法報道と場所化する社会空間（1950年代半ば～80年代後半）
 - ・1955年以後：民族団体と共産党間の路線変更→民族自決主義的合意（文，2000）
ウトロ記事の脱政治化（政治→犯罪など違法記事の集中）→激減
①の政治弾圧で出された記事とあいまって、ウトロの名が直接犯罪記事に登場
ウトロ内部の貧困は残したまま、他者像のみがピックアップ→以後は激減

5. 不作為が生み出した国際の場所

- (1) 物質的空間：高齢化、若者の離脱する貧困の滞留。居住環境の劣悪さ（水道未整備、氾濫）
- (2) 空間的コンテクストの変化と住民運動
 - ・1986年水道敷設運動開始→1988年土地の転売が判明（地上げ）→1989年立ち退き裁判に訴えられ、水道敷設運動の支援者（周辺地域の日本人市民）とともに居住権運動がスタート
 - ・裁判闘争+個人史のドキュメント+国際社会へのアピールおよび連帯
→脱工業化以後の都市変動と関連+地域的不作為の常態化からなる戦略
- (3) 民族の場所のあいまいな共存
 - ・不作為→ウトロ住民の内部孤立・依存的態度。地域内でのスティグマ
 - ・1955年まで（+1980年代以後の）の市民性の実践は、都市的状况に基づく国際的連帯が条件
 - ・しかし国民を想定することによって分裂の可能性を孕んだ「国際」

6. おわりに

- (1) 対象地域のクリアランス時の空間的コンテクストは、復興期に開発が始まった地域で、日本人住民と流入時期や社会的階層の面で異なっており、都市スラムとは違った孤立しやすい立地となった。
- (2) 市民性を実践するための「民族」は、日本 vs 在日という対立する個別の民族共同体（のアイデンティティ）というより場所を介して実践される共同体像で、ゆえに場所をめぐる重層的に働く。
- (3) エスニック住民からの権利主張の条件として都市的資源が必要とされ、地域ごとに差異がある。
- (4) (2) は (1) や (3) を覆い隠す強力な認識的装置でもあると考えられる。

※次稿の課題：アンダーライン部分を70～80年代における日本人支援者の参加から詳しく分析する。

参考文献

- Anderson, J. (2009). *Understanding Cultural Geography: Places and Traces*, Routledge.
- 江口信清 (2003). 「新聞記事を通じてみた京都の在日朝鮮・韓国人像の変容—1945～2000年の京都新聞の記事から—」 京都地域研究, 17, 17-34.
- 金菱 清 (2008). 『生きられた法の社会学—伊丹空港「不法占拠」はなぜ補償されたのか』新曜社.
- 姜 在彦 (2002). 「在日」百年の歴史. 環, 11, 152-164.
- 丁 智恵 (2011). 韓国・朝鮮という「他者」イメージ—1970～80年代の「転換期」. 放送メディア研究 8, 183-221.
- 全ウンフィ (2015). 京都府宇治市の地域新聞『洛南タイムス』における在日及び圏内在日集住地区・ウトロに関する記事一覧 (1946～2010年). 空間・社会・地理思想, 18, 59-90.
- 文 京洙 (2005). 戦後日本の地域社会の変容と在日朝鮮人. 立命館国際研究, 18 (1), 261-276.
- 三浦耕吉郎 (2006). 『構造的差別のソシオグラフィ—社会を書く・差別を書く』世界思想社.
- 水内俊雄 (2001). 大阪市大正区における沖縄出身者集住地区の「スラム」クリアランス. 空間・社会・地理思想, 6, 22-50.
- (2004). スラムの形成とクリアランスからみた大阪市の戦前・戦後. 立命館大学人文科学研究所紀要, 83, 23-69.
- 本岡拓哉 (2008). 『戦後都市における不法占拠地区の消滅過程に関する地理学的研究』大阪市立大学大学院文学研究科博士論文.
- 李 度潤 (2010). 「博士論文・修士論文紹介」日本の都市における外国人集住地区のまちづくりとそのコミュニティに関する研究: オールドカマーズ・在日コリアンを事例として. コリアンコミュニティ研究, 1, 51-58.